

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370802

研究課題名(和文) 植民地統治下の台湾先住民女性と「帝国」日本

研究課題名(英文) Taiwanese aboriginal women and imperial state of Japan

研究代表者

松田 京子 (MATSUDA, KYOKO)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：20283707

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：日本による植民地統治下の台湾において、圧倒的なマイノリティであった台湾先住民女性に対する統治政策について、台湾総督府によって1910年代前半に展開された「五箇年計画理蕃事業」を主な画期とする台湾先住民女性の役割の変化、1910年代から20年代の日本「内地」で形成・流布した台湾先住民女性イメージの変遷、1930年代に台湾先住民社会の「内地」化政策が展開される中で、台湾先住民女性に対して行われた「助産婦」育成事業といった具体的な事項の分析を通じて通史的に考察し、その結果、具体的な施策の特徴や台湾在住日本人女性、漢民族女性との関係性について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：It was considered like history about the government policy to Taiwanese aboriginal women in Taiwan under the colony government. Specifically, it was considered about the following 3 points mainly.

Change in the role of Taiwanese aboriginal women who does the first half in 1910 's with turning point of an epoch. Change in Taiwanese aboriginal women image in Japan from 1910 's to 1920 's. The "midwife" training project for Taiwanese aboriginal women in 1930 's.

As a result, the policy details became clear. Also, I discussed the relationship between Taiwanese aboriginal women and Japanese women living in Taiwan and Han Chinese women.

研究分野：日本近現代史・文化交流史

キーワード：台湾先住民 植民地主義 コラボレーター 新女性

1. 研究開始当初の背景

近年、日本近代史の分野で、「帝国」としての日本という観点から「植民地研究」は活発化している。日本帝国初の本格的植民地であった台湾についても、その例外ではない。

特に、最近では「植民地近代」という問題提起との関連で、植民地研究は、政治史、経済史的研究成果を重要な基盤としながら、さらに思想史・文化史的な関心にも広がり、大きな研究成果が蓄積されてきたといえよう。

本研究も、このような研究潮流の上に立つものであるが、しかし先行研究では、優れた例外はあるものの、その多くが、植民地台湾における被植民者としては漢民族系住民を対象として研究が展開されてきた。しかし本研究は、植民地台湾において、人口数的にも社会的にも圧倒的なマイノリティであった台湾先住民に、さらにその中でも弱い立場にあった台湾先住民女性に焦点をあてて、考察を行った。このことによって、植民地主義の暴力性・矛盾が先鋭的にあらわれた台湾先住民政策という地点から、日本「帝国」の植民地政策の性質を改めて問い直すことが可能になるという見通しをもっている。

さらに本研究は、台湾先住民女性と、台湾における「新女性」、台湾在住日本人女性の関係性を問うことで、植民地において女性がどのように階層化されたのかを解明することを目指したが、このような観点からの研究は管見の限りではほとんどない状況である。このような観点を導入することによって、女性史研究の活性化にも寄与できると考えている。

また本研究に至るまでに、研究代表者松田京子は、帝国意識という観点から日本「帝国」の諸相を明かにするという問題設定のもと、具体的には19世紀から20世紀への世紀転換期における帝国意識の形成過程の解明という課題で研究を進め、2003年に著書『帝国の視線 博覧会と異文化表象』を刊行した。その後、考察対象時期を1930年代に移し、当該期の日本「帝国」の膨張とそれに伴う植民地支配様式の転換という問題が、日本「内地」の帝国意識のあり方と、どのように影響し合うのかを、植民地台湾に焦点をあてて考察し、その成果を、論文「一九三〇年代の台湾原住民をめぐる統治実践と表象戦略」(『日本史研究』第510号)などとして公表してきた。さらに、日本「帝国」の形成期から崩壊期までというタイムスパンの中で、近代日本の植民地統治のあり方の推移と、それが植民地社会に与えた影響、および日本「内地」の社会意識のあり方に与えた影響を、特に台湾先住民に焦点をあてて考察し、その成果を論文「植民地支配下の台湾原住民をめぐる「分類」の思考と統治実践」(『歴史学研究』第846号)をはじめとした複数の論文で公表してきた。

2. 研究の目的

本研究は、植民地台湾、中でも植民地社会において圧倒的なマイノリティであった台湾先住民女性に焦点をあてて、近代日本の植民地統治のあり方の推移と、それが台湾先住民女性に与えた影響を明らかにし、さらに台湾先住民女性と、漢民族女性を中心とした台湾における「新女性」、台湾在住日本人女性の関係性を問うことで、植民地において女性がどのように階層化されたのかを、日本「帝国」全体の動向に留意しつつ解明することを目的とする。

3. 研究の方法

先に述べた研究目的を達成するため、具体的には次のような課題を設定し、関連する文献資料の調査・収集とその分析を主な方法として考察をすすめた。

- (1) 植民地台湾での先住民政策史において、第1期とされる1895年から1914年に焦点をあて、当該期において、台湾先住民女性が担った役割について考察することを第一課題とした。日本による植民地支配開始当初は、先住民女性の一部は、先住民集落(「蕃社」)の情報を植民地官僚にもたらし、植民地政府の意向を「蕃社」に伝える「仲介者」として、重要な役割を果たす存在とみなされていた。しかしそのような役割は、先住民居住地に対する植民地政府による実行支配が強まるにつれ、大きく変化していくこととなる。その変化の具体像について、当該期において台湾先住民社会に最大の影響を与えた、植民地政府による大規模な「討伐」・服従化政策、「五箇年計画理蕃事業」との関連で考察することを課題とした。
- (2) 台湾先住民政策史において第2期とされる1915年から1930年に焦点をあて、軍事力の行使による服従化政策が一応、終結した後の台湾先住民社会の変化と女性の役割の変化について考察した上で、1930年の霧社事件以降、本格的に展開する「蕃地」の「内地化」政策の中で、特に台湾先住民女性に対して実施された諸施策について考察することを第2の課題とした。「蕃地」の「内地化」政策とは、例えば、時計が刻む時間の遵守など、近代的な価値観を「蕃地」の隅々まで浸透させようとする政策であり、先住民社会の伝統的生活に劇的な変更を迫り、先住民の身体所作にまで及ぶ影響を与えたものである。この政策の展開の中で、先住民女性の生活習慣や価値観は、どのような変更を求められたのかという問題を、特に労働観念や衛生観念の変化に焦点をあてて考察することを課題とした。
- (3) 一方、1920年から1930年代にかけて、漢民族女性の中から、日本による新式の教育

を受けた、いわゆる「新女性」が植民地台湾でも登場することとなる。この「新女性」が台湾先住民女性をどのような存在としてとらえ、どのような働きかけを行ったのか。また植民地在住の日本人女性と、台湾の「新女性」、台湾先住民女性は、当該期にどのような関係にあったのかという問題を、第3の課題として考察した。その際、その後の展開、すなわち1937年から1945年の総力戦期への展望を示すことにも留意しつつ、植民地社会における女性の階層化という点も含めて考察することを課題とした。

4. 研究成果

(1)1895年から1914年に焦点をあて、台湾先住民女性が担った役割について考察した結果、次の点を明らかにした。

日本による植民地統治初期には、台湾先住民女性の一部は、植民地政府と台湾先住民共同体を結ぶコラボレーターとしての役割を果たしており、当該期に日本人の役人や研究者が先住民の集落に赴く際にも、先導的な役割を果たすことがあった点。

台湾総督府による「五箇年計画理蕃事業」の実施を主な画期として、台湾先住民女性の上記のような役割が不可視化されていく傾向がある点。

日本「内地」において、当該期に植民地として台湾が表象される際には、台湾先住民とりわけ台湾先住民女性は、エキゾチズムを満たす存在として、頻繁に取り上げた点。

(2)当初は予期していなかったが、(1)の研究成果からさらに発展させ、1910年代から1920年代の日本「内地」における「南洋」イメージの形成に、台湾先住民女性をはじめとした女性表象が、どのような影響を及ぼしたのかを大正期の博覧会を具体的な素材として考察し、次の点を明らかにした。

第一次世界大戦を経て、「帝国」日本にとって「南進」がより具体性を帯びる1920年代初頭に開催された博覧会においては、「南洋」表象はそれ以前のものとは異なる特徴をもつ点。

その特徴とは、「南洋」表象における「エキゾチズムの質が、それ以前の強烈な「野蛮性」の強調によって喚起される段階から、観光資源化された現地の歌舞音曲の披露をはじめ、ある程度洗練された演劇ショーによって満たされる段階へ至っている点。このようなショー・ビジネスの場面においては、女性が大きな役割を果たしており、観光事業の展開とジェンダーの関連性が深化している点。

(3)1915年から1930年の台湾先住民社会の変化を前提として、1930年代に本格的に展開する「蕃地」の「内地化」政策の中で、台湾先住民女性に対して実施された施策として、特に「助産婦」育成事業に焦点をあてて考察し、次の点を明らかにした。

当初は台湾在住日本人女性向けに展開された「助産婦」養成の動きが、やがて漢民族女性にも広がっていき、さらに1930年に台北州で開催された台湾先住民女性対象の「助産婦」講習会をきっかけに、各地で台湾先住民「助産婦」育成事業が行われていくようになった点。

出生率も高いが乳幼児死亡率も高いという状況を改善するという目的で推進された台湾先住民「助産婦」育成事業は、先住民集落配属の日本人警察官の家族の出産状況の改善という付随的な効果も期待された点。

1930年代中盤から、台湾先住民社会で本格的に展開される台湾先住民「助産婦」の具体的な活動が、先住民社会の出産・育児に関する習慣や衛生観念、さらに先住民女性の労働観に大きな影響をあたえた点。

以上のような研究成果に加え、日本植民地研究の展開と広義の「文化」研究の関連について、本研究が植民地研究全体のなかでもつ意義を確認するという意味も込めて、「国民国家論・ポストコロナ理論との関連」、「植民地近代」論との関連、「記憶や日記・口述歴史」に基づいた研究との関連という3点を軸に考察し、論文「植民地研究の展開と「文化」研究」として発表した。

さらに総力戦体制期に学齢期の台湾先住民女性が過ごした「日常生活」と、公学校に通う漢民族女性が過ごした「日常生活」の比較考察を行っており、この考察も含めて、1895年から1945年までの台湾先住民女性史をまとめ、一書として公刊するための準備を進めている。

植民地統治下の台湾先住民に関する歴史学的手法での研究は、少ないながらも優れた研究が発表されているが、管見の限りでは、本研究成果のように、台湾先住民女性に特化し、さらにイメージや習慣、観念を含めた広義の「文化」との関連で通史的に論じたものはほとんどない。その意味で本研究成果は、日本および東アジア、特に台湾での研究状況に一定のインパクトを与えることが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

松田京子、植民地研究の展開と「文化」研

究、日本思想史学、査読無し(依頼論文)
第 48 号、2016、pp.52-64。

松田京子、大正期の日本における「南洋」
表象 - 1914 年東京大正博覧会、1922 年平
和記念東京博覧会を中心に -、南山大学日
本文化学科論集、査読なし、第 15 号、2015、
pp.47-66。

〔学会発表〕(計 4 件)

松田京子、台湾原住民女性と「帝国」日本、
「第 21 回現代台湾研究学術討論会」(国際
研究集会) 2018 年 8 月 31 日・9 月 1 日(発
表確定) 関西大学(吹田市)

松田京子、1930 年代の台湾原住民政策の展
開 - 「内地」観光事業、「助産婦」育成事
業を中心に -、台湾史研究会・例会、2018
年 3 月 24 日、関西大学(吹田市)

松田京子、日本植民地研究の展開と「口述
歴史」 - ある台湾人女性のライフヒストリ
ーを例として -、名古屋市立大学日本文化
研究会、2016 年 9 月 25 日、名古屋市立大
学(名古屋市)

松田京子、世紀転換期の植民地表象と人間
の「展示」 - 「帝国」日本の博覧会を中心
に -、<植民博物館からポスト植民博物館
へ>学術大会、招待講演、2013 年 4 月 21
日、培材学術支援センター(韓国・ソウル
市)

〔図書〕(計 1 件)

松田京子、有志舎、「帝国」の思考 - 日本
「帝国」と台湾原住民 -、2014、全 274 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田京子(MATSUDA KYOKO)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：20283707

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()